

表現意図の判断の手がかり - 音響的特徴を中心に -

朴愛京 (パク エギョン) vak7171@hotmail.com

1. はじめに

話者の表現意図を判断するには多種多様な音声要素が関わっており、そのプロソディーと意味の関連についての様々な研究が行われている。特に、話者の表現意図を判断するのに文末イントネーションが大きく関わっていることは明らかにされている(国立国語研究所 1960、森山 1989)。

本研究では日本語母語話者(以下 NS)が外国人の日本語を聴いて何を手がかりとして表現意図を判断しているのかを明らかにするために、韓国人日本語学習者(以下 KSL)を対象に「そうですか」という文を使用し、実際の音声に基づいて調査を行った。「そうですか」は、実際の場面で多く使用され、しかもイントネーションによって文の形態が決められるタイプであるので、表現意図によって多様なイントネーションで発話することができる。本稿で取り上げる三つの場面「喜び」「がっかり」「疑い」の「そうですか」の音響的特徴を見ると、まず、「喜び」の表現意図の音響的特徴は、文末イントネーションがなだらかな下降調であり、声の幅(ピッチ幅)大きい(戸田 2004)という知見がある。次に「がっかり」の表現意図の音響的特徴は、ピッチは平坦であり(若干下降調)、ピッチの高さは低く、変動幅も狭い(前川 1999)とされている。最後に「疑い」の表現意図の特徴は、文末イントネーションは低いピッチが続いていて急激な上昇があり、ピッチ幅も大きい(前川 1999)という特徴がある。

このように「そうですか」の音響的特徴の異なる三つの場面を設定し、NS に表現意図が伝わったと評価されたグループと表現意図が伝わらなかったと評価されたグループの音響的特徴を分析する。KSL の発話に NS と異なる音響的特徴が表れた際、NS に意図がうまく伝わらず、その評価も変わってくることが予測できる。

2. 調査概要

2-1 調査協力者

韓国の母方言にはアクセントによる語の意味弁別を持っている方言(例:慶尚道方言)とアクセントによって語の意味が区別されることない方言(例:ソウル方言)に大きく分かれている。本研究では方言差による影響をうけることをさけるため、調査協力者を韓国ソウル出身者に限定し、また音響分析において、比較の基準を一致させるために女性(10名)のみとした。

2-2 評価者

日本語教育と関わりのない NS の大学生 50 名である。

2-3 調査方法

録音資料は、パソコンに取り込み、WAVE ファイル化されたデータに対して、SUGI Speech Analyzer (2000,富士通 ANIMO)を用いて音響分析を行った。NS の評価により、

表現意図が伝わったと評価されたグループと表現意図が伝わらなかったと評価されたグループに分けて、基本周波数の変動（文末イントネーションとピッチの最高値・変動幅）と持続時間（「そうですか」全体の持続時間と構成要素の割合）を比較分析した。

2-4 場面

《 職場で人事異動があり上司が替わることが分かっているとき、次の上司は田中さんか、山田さんだという噂がある。ある日、先輩が次の上司は「山田さん」だという噂をあなたに伝えたとして。 》

場面 A「喜び」：あなたは山田さんを尊敬しており、嬉しいと思っている。

場面 B「がっかり」：山田さんが苦手で「ああもう嫌だ」と思っている。

場面 C「疑い」：あなたの持っている情報と噂が矛盾する場合であり「本当ですか？嘘でしょう」と思っている。

（ 仕事が終わって、会社の先輩と居酒屋でお酒を飲みながら... ）

先 輩：ねえ、聞いた？

あなた：え、何ですか？

先 輩：今度の課長はやっぱり山田さんだって。

あなた：「そうですか。」

3. 結果と考察

表現意図が伝わったと評価されたグループと伝わらなかったと評価されたグループにわけ、音響分析を行った結果、各場面の特徴と表現意図が伝わったと評価されたグループの特徴が明らかになった。

場面 A「喜び」

文末イントネーションがなだらかな下降調でありながら、ピッチの最高値が高いものは評価が高い。また、持続時間の構成要素の割合では、表現意図が伝わったグループでは「か」が最も長く、「そう」と「です」の割合は「そう」の方がやや長い。ピッチの最高値は三つの場面の中、最も高い。

場面 B「がっかり」

表現意図が伝わったグループのものは、文末イントネーションがなだらかな下降調でありながら、ピッチの高さは低く、ピッチの変動幅は小さい。「そうですか」全体のピッチの変動幅は三つの場面の中で最も小さい。

場面 C「疑い」

表現意図が伝わったグループのものは、文末イントネーションは低いピッチ区間が持続した後、上昇が始まる。「そうですか」全体のピッチの変動幅は三つの場面の中、最も大きい。

以上のことから、次のことが明らかになった。NS が KSL の発話を聴いて表現意図を判断する際に、文末イントネーションは3つの場面に全て関わっているが、ピッチの高さや

変動幅は「喜び」と「がっかり」の場面だけに関わっている。「疑い」の場合は文末イントネーションですでに判断された。但し、「疑い」の場合、全体的にピッチの変動幅が大きいという傾向が見られた。文末イントネーションが正しく実現されたものやピッチの高さや変動幅が一定の範囲であるものである場合、持続時間に揺れがあっても、表現意図を判断するのに大きい影響はないことが明らかになった。

4. おわりに

本研究は外国人が日本語を発話する際、日本人とは異なるイントネーションのため、円滑なコミュニケーションに支障が生じるということから出発したものである。NS の評価者を日本語教育と関わりのない非教師を対象にしているので、教師以外の立場の人々が外国人の発音を聴いて、どのような要素を表現意図の判断の手がかりとするのかを探ることは、教師が的確な指導を行うことにおいて有益な情報をもたらしてくれるものだと考えられる。

調査の結果、NS が KSL の発話を聴いて何を手がかりとして表現意図を判断するのが明らかになった。今後の課題としては韓国語においても同様の場面での調査を行い、日本語の「そうですか」と韓国語の「 (そうですか) 」に現れる音響的特徴を比較分析する必要がある。さらに、その発話を韓国人と日本人に聞かせ、それぞれの評価に表れる相違点や類似点を比較分析し、母語の影響との関係を明確にする必要があると考えられる。

参考文献

- 国立国語研究所 (1960) 「話しことばの文型 (1) - 対話資料による研究 - 」国立国語研究所報告 18
- 戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーイーネットワーク
- 前川喜久雄 (1999) 「音声によるパラ言語情報の伝達」国立国語研究所相律 50 周年記念『研究発表会資料集』, 93 - 98
- 森山卓郎 (1989) 「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育』第 1 巻, 172 - 196
明治書院
- Dulay, H. and M. Burt. (1980) 「On acquisition orders」『Second Language Development』Trends and Issues : Tubingen